
狼殺し辺境伯の告白

粗目

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼殺し辺境伯の告白

【Nコード】

N6328Y

【作者名】

粗目

【あらすじ】

収税官ウルマンは王命により、殆ど領土を出ることのないシュテルンベルグ辺境伯の、まともな地図すらない山中の領土を訪れた。その地でウルマンは辺境伯から、彼の祖先であり、そもそもこの土地を拓いた『狼殺し』の名を持つ男にまつわる伝説を聞く。

1・边境伯

私は顎からしたたりおちてくる汗を手の甲で拭った。羊革の手袋は不快さに耐えかねてとうに脱いでしまった。かまうまい、ここは都から遠く離れた森の中だ。私の無作法を咎める人間はおるか、人間自体、この二日というもの見ていない。

山里の宿を出てよりすでに二昼夜。馬が一頭通れるほどしかない細い山道をあちらに折れ、こちらに曲がり、としているうちに己の通ってきた道は、少し進んで振り返るともう草木に埋もれるように見えなくなる。道なりに歩いていたはずなのに眼前にそびえたつ岩壁を見て引き返したこともあれば、道がいつのまにか途切れてしまったこともある。

森林の中で地図はもとより訳に立たない。というよりも、このあたりには測量技師が立ち入ったことすらないのだろう。どの地図も、山の中に適当に城の絵が描かれ、シュテルンベルグ边境伯領、と記されているのみだ。

私には、山里の人間の「道があるから迷うことはない」という言葉一つが頼りだったが、その頼りの道も、シュテルンベルグ边境伯領と山里をまっすぐ結ぶものではなく、粗朶や茸などを採る為にわけいるものや獵小屋に通じるものが入り乱れている。

生まれたときから都暮らしで、森といえば王の狩場かしらず、それも中に入ったことはない私が、二晩も森の中で野営するのは恐ろしい経験で、殆ど眠れていない。疲れも不安も限界に達しつつあり、不安定な山道に入ってから背に乗ることをやめ、手綱を引いて

歩かせている愛馬イジーも私も不安を敏感に察して落ち着かない。

シュテルンベルグ辺境伯の領土へ足を踏み入れるのを強硬に拒む山里の人々に道案内などとても頼めなかったが、やはり無理にでも連れてくればよかった。そうすればもう少し苦勞の少ない道程を行くことができただろう。

無理矢理に人に要求を飲ませることができ性格でもなく、また人を威圧する剣の腕や人心を懐柔する財貨も持たない、一介の収税官の我が身を恨みながら、私は再び滴ってきた汗を拭い、顔をあげた。

見渡す限り木々の林立する森だ。遙か頭上に枝を広げ夏の盛りの青々とした葉を茂らせる幹の太さは私の腕を回しても半周すらできないだろう。そういう木々の合間に私の背丈や、それより少し高い若木が茂っている。

上を見上げ天突く木々を眺めていた私はふと、森が明るくなっているらしことを感じた。昨日は茂る葉が日の光を遮り始終薄暗かった。おかげで汗もさほどかかずに済んだのだが、今日はずいぶんと暑い、と感じたのは日光が入り込んでいるせいだったらしい。

森に人の手が入っているのだろうか。

だとすればシュテルンベルグ辺境伯の領土は近いのかも知れない。

そう思うとつかれきった体にも少し力が沸いてくるようで、私は、同じように疲れた様子の愛馬の轡をとって歩きだした。

それにしても、本当にあのシュテルンベルグ辺境伯の領土がこの先にあるのだろうか。

シュテルンベルグ辺境伯の名はこの国に住む者ならば誰でも知っている。

遠い昔、この森を開き領土とした初代から代々狼殺し、の名を戴いてきた家だ。

しかし百年と少し前に起きた戦乱で、海を越えてやって来て先王家を滅ぼし、新しくこの国を治めることになった王の名に狼とついたことから、王家をはばかって現在のシュテルンベルグに家名を変えた。

シュテルンベルグ辺境伯、そして彼の領民はいかなる戦乱にも参加せず、主家が変わろうとも支配者に恭順を誓う。

とはいえその主家の前にも代替わりの挨拶程度しか顔を見せず、殆ど自領から出ることのない領主の顔を一度も見たことがないという王もいる。しかもそういう振る舞いを許されてきた家だ。

年ごとに献上される駿馬が優秀であること、納められる税金が多額であること。

それだけならば金にものをいわせる卑怯者と謗られもしょうが、シュテルンベルグ辺境伯の名は畏怖や憧れとともに語られる。

まず、恐ろしい未開の地である山を拓いたこと。漂白してきた一族であるにも関わらず彼らは当時その山と接する土地を治めていた王に恭順を誓い、無用な争いを避けた。

しかし横暴を許したわけではない。

先王家の時代、当時は狼殺しの名を冠していた辺境伯の領土を奪おうとした近隣の貴族たちによる軍勢を、辺境伯はわずか十分の一にも満たない軍で敗退させた。のみならず首謀者を捕らえて王城ま

で出向き、「領地に入り込みし狼を討伐いたします」と、王の前で躊躇なく貴族六人の首をはねた。

当時の王は内心はどうあれ、辺境伯の剛毅を激賞せざるをえず、未来永劫辺境伯の領地は不可侵であることを神と伯と人民に誓った。

治める王家が変わってもシュテルンベルグ辺境伯のこの逸話は広く伝わり、未だに絵本やタペストリーの題材になり、シュテルンベルグ辺境伯の領地は永遠に不可侵、と謡われる。

戦火と領主の横暴に怯える農民にとっては夢のような話だ。

私の家は王都の商家だが、生活に追われることは農家も商家も変わりなく、まるで理想郷のように語られるシュテルンベルグ辺境伯領鋸とを私はずいぶん長いこと、おとぎ話の一つだと思っていた。学校で、領土が実際にあることを学んだが地図上に記された名前だけで、やはりその存在は漠としたままだった。

しかし、民衆に理想郷のように語られる土地が己の国の中にあることが、支配者にとって面白いはずもない。まして伯領は、領土の広さや戸数すら分らないのに、広大な平地を持つ領主と変わらぬ額の税金を納めている。領地内に金脈でもあるのではないかという噂は昔から絶えることなくあり、浪費の著しい今王はそれが欲しいのだ。

私は己に課された勤めの重さと理不尽さに重い息を吐き、荷を背負った馬と共に細い道を進んだ。

昼を過ぎ、夕刻も間近になった頃、視界は急に開けた。斜面に沿

うように緩い弧を描きながらずっと続く、なだらかな下り坂の果て、尾根に囲まれた谷底に、尾根を背にした大きな館の前面に伸びる道を囲むように百戸ほどの家が立ち並んでいる。

小さな街だが、伯領の一つだろう。私は生き返ったような気持ちで残照の中、長い下り坂を進み、門の前にたどり着いたときには早くも日が落ちかけていた。

「王都よりシユテルンベルグ辺境伯にお目にかかるべく参りました、収税官のウルマンと申します」

閉ざされ、かがり火を焚いた門の前で武装した門番に名乗り、王の徽章の入った身分証を渡す。これで悪くても今夜は門番小屋で眠れるだろう、とほっとしながら待っていると、私の身分証を持っていった門番が戻ってきて夜間出入り用の潜り戸を開けた。

「領主館にご案内します」

「いえ。もう遅いので今夜はどこか夜露をしのげる場所をお貸し頂ければ。領主には明日お目にかかります」

「申し訳ありませんが収税官殿。他所の方をお泊め出来るのは領主館しかございません。領主館には伝令を走らせましたので、支度もしております。都から来られた方にとっては領主館に泊まるなど考えられぬことかもしれませぬが、田舎では珍しくもないことです」

「そう、ですか」

そう言われてしまえば私も納得するしかない。イジーを引きながらこの集落を出てどこまで歩かされるのかとうんざりしていると、家々の明りや酒場の賑やかな声がところどころで聞かれる大通りを突っ切った先、下級貴族が都に持つようなこじんまりとした館に門番は足を踏み入れ、玄関をノックした。

まさかここが領主館だともいうのだろうか。咄然としている私
の前でほどなく中から扉が開かれ、壮年と老年の堺にあるようなが
つしりとした体つきの男が現れる。

門番と一言、二言交わして男は私に頭を下げた。

「当屋敷の執事でございます。ウルマン殿、馬はその者にお引渡し
ください。厩で世話をさせましょう。あなた様はどうぞこちらに、
お部屋に案内いたします」

「あ、ああ。ありがとうございます」

どうやら本当にここが領主館らしい。イジーの背に括りつけた荷
物を解き、手綱を控えていた男に渡す。イジーは気がかりそうに少
し私を見詰めていたが、おとなしく引かれていった。

両手に荷物を持つと、すぐに執事と名乗った男が着替えなどの入
った大きな袋を受け取り、先に立って歩き始めた。

「出来ましたら先にシュテルンベルグ辺境伯にご挨拶を……」

「主は食事中でございます。ウルマン殿のお部屋にも夕食を運ばせ
ますので、まずはお食事をお済ませください」

それが、ただ食事をしろ、というだけではなく埃だらけの上に昼
間さんざん汗をかいてよれよれした服を着替え、身を清めろ、とい
う意味だということは私にも分かった。私は大人しく案内された部
屋で、手回しよく用意されていた湯で体をさっぱりと拭きあげ、髪
にも湯を流し、櫛で整えた。

寝室で着替えをしている間にテーブルに食事の支度が出来ており、
一人きりの食卓に二人も給仕がついて聊か気詰まりを感じつつ、そ
れでも空腹が勝って、山城らしい、鳥や木の実を使った料理を片端
から腹に入れた。

久しぶりにまともな料理を腹に収め、屋根のあるところにいる安心感でどっと眠気が押し寄せてくる。

けれど、迎えにきた執事にやはり挨拶は明日に、などと言える訳もなく、私は眠気を覚まそうと努力しながら薄暗い廊下を歩き、棟の反対側にあたる端の部屋に案内された。主が館の端の部屋を使うなど聞いたことがない、と内心首をひねる私の前で執事は静かに扉を叩き、中から低いいらえを聞いて扉を開けた。

「ウルマン殿、ようこそ我が領地へ」

蝋燭の数本乗った燭台を二つ、三つ使っているのだろう。明るい部屋の中で椅子に腰掛けていた人物が立ち上がってそう言った。私は扉の前で領主や貴族に対する礼を取り頭を深く下げながら私は、四十も半ばのはずのシュテルンベルグ辺境伯が意外なほど若く見えるのに驚いていた。

蝋燭の明りのせいもあるだろうが、見た目なら三十代になったばかりの私と大差ないように思う。

促されて頭を上げて改めて見ても、皺の少ない顔や濃い麦わら色の髪を持つ辺境伯は聞いている年とは思えないほど若々しい。

向かい合い、少しずらされた椅子に腰掛けるように勧められ、二人の間に置かれた丸い小卓の上にぶどう酒の入ったぼってりしたガラスの水差しとゴブレットが置かれ、辺境伯はそれになみなみとぶどう酒を注いで私に渡した。

「ろくな道もない山中、さぞお疲れになったことだろう」

「とんでもございません。子供の頃から聞かされていた辺境伯領に足を踏み入れることが出来るなど、まだ信じられぬ心地です」

「都で我が領のことがどう語られているかは知らぬが、ごらんの通りの小さな所だ。領民は千に満たず、この街のほかには僅かな畑しかない。我が領の馬の質が良いのは、平地で馬を育てられずに山で育てるからだ。山を駆けて馬の足が強くなる。民らは皆、毎日夜明けより日暮れまで働き、ろくな贅沢も娯楽も知らぬ。この山中まで旅芸人など滅多に来ぬから、客人はいつでも歓迎されるが……」

辺境伯はそこで言葉を切った。無論、都から派遣される収税官がただ人に歓迎されるだけの無害な旅人であるはずもない。

私はそのことを心から残念に思った。

「……まあ良い。仕事の話は昼間にすることにしよう。ウルマン殿は当地にご興味がありとのことだったが、ならばこの地に伝わる伝説などはご存知かな？ それこそ我が領の子供たちは皆親や年かさの者から聞かされる話だ」

「いえ。私や都に暮らすものたちにとってはここは妖精の国と変わりありません。どうかその伝説を話していただけますか？ 良い土産になります」

「妖精の国か。そのような美しい国であれば我ら憂いもなくいられたであろうにな。……そう、話をしよう。まず、この地を拓いたのは我が祖先、エドゥアルト・ネイエドリー。彼がどこから来たのかは私も知らない。或いは海の向こうから来たのかもしれない。どんな理由があつたのか故郷を捨てた彼らは永住できる土地を探していた。そしてこの地を見つけた。しかしネイエドリー達がこの場所にたどり着いた時、この場所は野生の土地ではなかった。すでに先住者が居たのだ」

「ネイエドリー様は、この地を拓いたからこそ狼殺しの名を戴いたのではなかったのですか。私はそう聞いておりました」

「この森に狼はいない。……それより、疲れきっているようだな。顔色が悪い。この話の続きは明日にしよう」

「は、いえ。けれど、まだ冒頭しかお話いただけではありません」

「森で眠るのは馴れていても気の張るものだ。君の用事も明日一日で済むものではあるまい。今宵はゆっくり休むといい、ウルマン殿」

そう言われて、強いて続きをねだれる相手ではない。私はまだ伝説ともいえない部分だけで話を終わらせられ、しぶしぶ席を立つた。挨拶をして辺境伯の部屋を辞し、与えられた部屋に戻る。歩いていると体が自分のものではないかのように重く感じられた。廊下の端までが酷く遠い。強いて足を動かしながら、辺境伯は私に課せられた命令を知っているのだろうかとふと思った。そうでなければ、一日で終わらないなどなぜ言えるのか。

それとも、収税官が出向くような用事だけに、つまらぬ交渉ことも長引くと思っているのか。

ようやくと部屋にたどり着き、寝巻きに着替えて寝台に寝ると、まるで溶けるように体が眠りに沈んでいく。

眠りの中、この森にはいないはずの狼の声を聞いた気がした。

2・兄妹

翌朝はすっきりと目が覚めた。夢も見ずに深く眠れたのは久しぶりだったので、大分寝過ぎしてしまっただろうと覚悟したのだが、窓から入ってくる光はまだ弱く、早朝でなければ今日は曇りのようだった。

昨日荷解きをして長持に入れた、埃っぽい服の中から比較的まともなものを選んで着、洗面を済ませて髪を梳く。そんな当たり前のことだが、自分が今、シュテルンベルグ辺境伯の城にいるのだと思うと身の裡が震えるような高揚を感じた。

部屋に入ってきた召使の案内で一階の朝食室へと案内される。十人ほど座れるテーブルが部屋の中央に置かれた朝食室には、先客がいた。私より数歳若いだろう年の男と、それよりも年下に見える女だ。二人ともシュテルンベルグ辺境伯と顔立ちが似ているので、血の近い親戚なのだろう。

客とはいえ私は身分の低い収税官だ。戸口で深く頭を下げた挨拶をした。

「昨夜からこの城に滞在させていただいております、ウルマンと申します」

「ようこそ辺境の地へ。私はパヴェル、これは私の妹のアンナ。辺境伯アウグストとは従兄弟になります。幼い頃に両親を亡くしてからこの城で暮らしています」

「ウルマン殿、どうぞこちらへ。アウグストは朝が早くて、もう朝食を終えて執務室に居ります。朝食を終えたらご案内しますわ」

「さあ、こちらへお掛けください。お仕事でいらっしゃったのでし

ようが、少しは私達と話をする時間も取れるでしょう？ 都の話など滅多に聞けるものではないと、昨夜あなたがいらしたのを聞いた時から楽しみにしていたのです」

促されるまま席に着き、運ばれた朝食を終える間にも兄妹はひっきりなしに話しかけ、あれこれと質問をしてきた。麦わらのような金の髪に青い目を持ち、すらりとした体躯も良く似た兄妹だった。私が食べ終えるのを待っていた二人が立ち上がった時驚いたのはアンナがドレスの上に剣を吊っていることだった。男が持つような刃渡りの大きいものではないが、女性が護身に持つような刀身の短いものではなく、紛れもない長剣だ。ただ、こんな剣は見たことがなかった。

私の視線の先を見やってパヴェルは苦笑した。

「妹のわがままでアウグストが鍛冶に作らせたのです。女でも使える剣を、とね。妹は史上初めての女將軍の座を狙っているのですよ」
「……それは、また……」

「まあいやだ、兄の冗談ですわウルマン殿。でも宜しければ後で一試合いたしません？ 都の方の使う剣はどのようなものか興味があります」

「申し訳ありません。私は文官で、剣は全く使えないのです。旅に出るからと護身用にこの剣を買ったのですが、一度も抜いたことがないほどで。この剣に本当に刃がついているのかも知らぬほどで」
「まあ」

アンナの声に呆れと失望を感じて、私は恥ずかしさに少し頬が火照った。パヴェルが妹を嗜めるから尚更だ。

結局それから気まずく沈黙したまま二階にあるという辺境伯の執

務室へ向かっていたのだが、階段を上がり、中庭を望む回廊に出るとアンナが再び声を上げた。

「ウルマン殿。このタペストリーをご覧になって。これはネイエドリーがこの地にやってきてからの物語を織ったものです。これが一枚目、山中を彷徨うネイエドリーが谷底に平地を見つけた場面」

アンナに促され、回廊の壁に掛かったタペストリーを見ると経年にほつれ、色あせてはいたが緻密な織のタペストリーには確かに、昨日私がそうだったように山間の平地を見下ろしている、金色の髪の毛と、その周囲に幾人かの人間が描かれている。しかし、と私は首をかしげた。

「初めてこの地を訪れた絵にしては、どうして平野に建物らしきものがあるのですか？」

「アウグストから聞いていらっしやいませんか？ この地には先住の民がいたと」

「……、ああ、そうでした。大変失礼いたしました。確かにそう伺いました」

パヴェルに言われ、私はその話を昨夜聞いたことを思い出した。昨夜は疲れきっていて、夕食を食べたあたりからの記憶が少し曖昧だ。

「しかし、不思議ですね。この地では先住者がいたのが当たり前のように語られているようですが、都では一度もそのような話は聞いたことがありませんでした。ネイエドリー様が森を拓き領民に安寧の地を約束した、とだけ」

「ここは都からは遠いから。ウルマン殿もいらしてお分かりになったと思いますが、一番近い集落でも道を知る者でさえ一昼夜、馬車

も通れない道を碌な目印もなく行かなければなりません。その集落から一番近い領主館まで馬で十日。王のおわす都まではどんなに急いでも三ヶ月は掛かります。この地で生まれた者は、馬の行商に着いていくことはあっても他の場所で働くことを望みません。貧しい領土ですが、まあまあ領民が飢えることのないだけの収穫は望めます……と、タペストリーを歩き過ぎてしまいました。ネイエドリーの話の続きはアウグストに聞いてください。ここが執務室です。話が終わったら領地を案内します」

「いえ、そのような。パヴェル殿もお忙しいでしょうに」

「アウグストの手伝いをしているだけです。アンナ、お前はどのような？」

「ここで待ってるわ。長くなりそうだったら教えてちょうだい」

「わかった。アウグスト、ウルマン殿をお連れしました」

扉の向こうから穏やかな応えがあり、招かれた部屋は窓を背にして机と椅子の一そろいが、そして椅子がいくつか置かれているだけの簡素な部屋だった。部屋の隅に暖炉はあるものの、壁はタペストリーもなく石壁がむきだしのままだ。

これが本当に領主の執務室かと驚き呆れていると、パヴェルが椅子を勧めてきたがそれは断り、机の前に立った。対等に話ができる相手ではないことが一つ、これから自分がする話に引け目を感じているのも理由の一つだ。

懐に入れてきた国王の命令書を辺境伯に差し出すと、彼はそれを一読してため息をつき、命令書を脇に立つパヴェルに渡した。

若いパヴェルの反応は辺境伯のものより顕著で「馬鹿なことを……！」と呻くように吐き捨て、今にも命令書を破きそうに力を込めて握り締めた。そのまま、皺のよった命令書を叩きつけるように机に

戻す。

その全ての所作を、私は諦めと共に見詰めていた。

パヴェルとアンナが朝食室で見せてくれた親しさは、これで消えてしまっただろう。一目でこの兄妹に心惹かれた私にとっては残念なことだったが、仕事なのだから仕方ないことだった。

「金脈など無い、と何代かの王には説明申し上げたはずだが、また蒸し返されたか」

「国王陛下におかれましては、金鉱かさもなければ増税をお望みでいらっしやいます」

「しかし我が領土にはこれ以上税を納める力はない……。ウルマン殿には領地をくまなく見てまわり、金鉱の類など無いことを確認していただきたい」

「……しかし私は、一介の収税官に過ぎません。無論伯のお言葉も報告いたしますが、王のお言葉を違えることは難しいことかと存じます」

「全く、あの強欲が！ 戴冠式の時にも駿馬を献上させた上に財貨まで召し上げた癖に、今度は増税だと！？ 辺境伯領は王家の威信の及ばぬ場所だと知らぬのか！」

「パヴェル。口を慎め。ここも王家の領土の一つであることには違いない、王家の威光は無論及ぶのだ。……ウルマン殿、我が領土の収支を、さしあたって十年分ほど用意させる。お好きにご覧下され。その上でどのような問いにも私かパヴェルが答えよう」

「ご高慮に深く感謝いたします」

私は深く、頭を下げた。理不尽を突きつけられたのだ。使者である私を領土から叩き出してもおかしくはない。それをここまで厚遇

してくれる。敬意に自然に頭も下がろうというものだった。やはりこの方は世間に言われる通りの高潔な英雄、狼殺し辺境伯の一人でいらっしやるのだ。

書類は午後までに用意させよう、という言葉で、これ以上この部屋に自分が居る必要も理由もないのだと理解して、私はもう一度礼をして部屋を出ようとした。すると、下げた頭のむこうで辺境伯が言葉を継いだ。

「昨夜は話が出来なかった。もし君が良ければ今宵話の続きをいたそう」

「は。しかし……」

こんな嫌な話を持ってきた人間だ。辺境伯の高潔な人柄ならあからさまな冷遇はされないだろうがそれでも、夜私室に招いて仕事と関係の無い話をするなどとは考えられず、私は口を濁した。と、パヴェルが口を開いた。

「気にすることはありませんよ、ウルマン殿。アウグストはネイエドリーの話を誰かに聞かせるのが好きなのです。今でも毎年、冬至の祭りの夜に子供たちを集めて聞かせていますし、私達兄妹も何度聞かされたか知れやしない。皆知っている話ですからね、話を知らないあなたに聞かせるのを楽しみにしているのですよ」

私に厭わしげな目を向けるだろうと覚悟していたパヴェルさえも、陛下からの命令書など無かったかのように穏やかな声と顔だ。

「…ありがとうございます」

「さあ。ではアウグスト。昼間は私とアンナでウルマン殿に領地を案内します」

「頼んだ」

「さあ行きましょうウルマン殿」

促され、部屋を出ると待ち構えていたアンナが「話の続きを」をタペストリーの前に引つ張っていかれかけたが、そんな妹を兄が留めた。

「駄目だアンナ。ネイエドリーの話はアウグストの為に取っておけ」
「分かったわ。じゃあ今の話をしようか、何故アウグストが奥様を娶らず今も独り身でいるのか」

「アンナ」

「辺境伯には、奥様がいらっしやらないのですか？」

そういわればまだ一度も見たことがないが、身分の高い女性などそんなものだから不思議にも思わなかった。パヴェルもアンナを止めたものの別に秘密だとか外聞の悪い話だというわけではなさそうで、仕方なさそうに妹の口の軽さを非難してから言葉を継いだ。

「一応、今のところは従兄弟の私が後継ぎになるという話になっています」

「アウグストは叶わない恋をしていますのよ」

「アンナ！ 全く、女というのはどうしてこう口が軽いのか……」

「男にだって口の軽いものは大勢おりましてよ」

「全く口の減らない。大体、そんな法螺話をどこで仕入れてきたんだ」

「馬達が噂話をしているのを聞きましたの。ああそうそう、ウルマン殿、あなたのあの綺麗な連銭葦毛の馬。蹄鉄が合わなくなっているみたいでしたから、今日付け替えさせます。勝手に申し訳ないのですが、辛そうでしたから」

「いえ！ ……ありがとうございます。五日ほど前に不具合に気づ

いたのですがすでに鍛冶屋のある集落は無く、イジーも良く我慢をしてくれて歩いてくれました。ずうずうしく蹄鉄の付け替えをお願いしようと思っていたのですが、お氣遣いをしていただきまして」「イジーという名前ですか？　とても良い子。ですから今日は他の馬を用意させますわ。うちの馬は皆大人しくて性質のいい子ばかりです」

「妹の言うことはあまり信じない方がよいですよ。とんでもなく気性の荒い奴でも、アンナに掛ければ『いい子』になるのです。このまま出かけられますか？　今日は少し上がって全体を見ていただくうと思っっているのですが」

「はい、私はこのままで平気です。御二方ともご準備がおりでしたら、私は厩でお待ちしておりますが」

「私は台所に寄ってから厩に行きます。お兄様は？」

「私はウルマン殿と厩に行くよ」

この城は、中庭を囲んでいびつな菱形のような形をしているようだった。さすがに部屋とは違い、廊下の明り取りにはガラスが嵌っていない。中庭を伝って掃除をする女達の物音や話し声が聞こえ、大きく取られた明り取りからは夏の午前中の光が惜しみなく降り注いでいる。光の中で見ても城は廊下の隅にいたるまで不潔なところはない。都の城でもこれほどきちんと管理されている館などあまり無いだろうと思ったが、この城には良く管理されている館にありがちな、抑圧され、支配された召使達の発するぎすぎすとした雰囲気も無かった。

「……、ウルマン殿」

階下に降り、厩に向かい城を出たパヴェルは、人気のなくなるの

を見計らっていたように低く声を上げた。

「国王は本気なのでしょうか。今までこの地に与えられてきた不可侵の掟を破るとは」

「……私には判りかねます。しかし、辺境伯領に兵を差し向けるのを嫌がる者は多いでしょう、陛下のご命令であつてもすんなりと事が進むとは私には思えません」

「つまり、国王には人望がないと」

「パヴェル殿。私は軽輩なれど陛下の臣です」

「失礼しました」

「いえ、謝罪を求めているわけではございませんが……、ええ、そうですね。辺境伯の名は強い、陛下はそれを恐れておいでです。進軍する振りをして恭順を試そうとすることは十分にありえます」

「ここで無理な増税に応じるかありもしない金鉱を差し出すか、後になって兵を差し向けると脅され忠誠を試されてからおなじものを差し出すかのどちらかしかないというわけですか」

「そういうことだと、推察いたします」

改めて口に出されればその卑劣さが身にしみて私は恥ずかしさに顔を伏せるしかない。パヴェルがこの若さで見破ったように、とうに辺境伯にも陛下の胸の裡は知れているだろう。だからこそいたたまれない。一介の収税官だの軽輩だのと自らの責任を軽くしたところで、実際に私がここにきてやっているのは、内戦の予告という卑劣な脅しに過ぎないのだ。それも、陛下が浪費をするための財貨を得る為だけの目的で。

パヴェルは更に低い声で微かに呟いた。

「我らが王を必要としたことはないというのに」

その言葉に返事もできずにいると、ややあつて明るい声でパヴェルは前方に見えてきた厩を指差した。すでに厩の前に三頭の馬が鞍をつけて出されている。どれも皆、私のイジーとは比べ物にならぬ、丈高くがっしりとした体つきの美しい馬だった。

「これは…素晴らしい」

「黒鹿毛が私のモルガン、月毛の馬がアンナのカレル。あとはニコラですね。美しい栗毛の馬ですが気位も高く、私も乗せません。ニコラに女鞍がついているからあなたをカレルに乗せるようですね。カレルは少しのんきものだが大人しい良い馬ですよ」

パヴェルの言葉通り、少し経って、昼食だという包みを持ってやってきたアンナは私にカレルを任せ、自分はニコラに乗った。横向きに乗る女鞍は跨れる男の鞍より安定感が悪く駆けさせるのは難しいといわれているが、さすがに駿馬を多く出す土地で育っただけあって、アンナは傾斜の続く長い道を素晴らしい速さを維持したまま軽々と御し、パヴェルの手並みが妹より劣るはずもなく、結局私はカレルと共に最後尾を引き離されないように着いていくのがやっとの有様だった。

昨夜私が降りてきた長い道を登りきり、少し進むと木々が途切れ、下の様子がはつきりと見て取れた。アンナは少し下ったところに沢があるから馬に水を飲ませてくる、と三頭の馬を引き連れて行ってしまった。気を使ってくれたのだろう。私はパヴェルと共に下を見下ろした。

伯爵領というよりも少し大きめの街、と言った方が良い規模だ。

昨日百戸程度と見た家はもう少しありそうだが、伯爵の城と門をまっすぐに結ぶ緩い斜面の道沿いに固まっている家が大半で、あとは谷地一杯に広がり、そうして道のついている左側の斜面にも広がっていく農地の合間にぽつぽつと点在しているだけだ。昨日は気づかなかったが伯爵の城の右斜め後ろに道があり、森の中に続いている。恐らく馬や羊を放牧するための道なのだろう。

私は改めて疑問だった。いくら駿馬を産出するとはいっても、これだけの規模の領土しかもっていない伯爵が、取り決めとはいえ何故あれほど多大な税金を納めることができるのか。税金だけを見てみれば、この数倍の領土があつて当然なのだ。私も実際にここに来るまで、もっと広大な領土を持つているに違いないと考えていた。多分皆、そう考えてきたはずだ。今回私をここに遣わした陛下ですら、辺境伯領がこれほど小さな土地であるとは想像もしていないに違いない。

この地は、地図にも載っていない場所なのだ。歴代国王の誰も足を踏み入れたことのない土地だ。今まで誰も、この領民の他は正確な場所すら知られていない、御伽噺のような土地。

「……ここだけ、ですか」

「ええ。小さいでしょう。もともと一族のものが食べていけるだけの土地を欲したのです。時代と共に少しずつ人が増えて開拓地は増えましたが、それでもこれだけです」

「パヴェル殿は、辺境伯がどれほどの税を納めているのかご存知でしょう。これだけの土地であの税が賄えると？」

「農作物は殆ど余剰はありません。領民達が納める税では到底払いきれるものではない。足りない分は馬で」

「馬だけで？ 申し訳ありませんがパヴェル殿、私には信じられませんか」

「……先ほど、アンナが言っていたでしょう。アウグストの恋を」

唐突に変わった話に、私は首をかしげて隣に立つパヴェルを見た。彼は優しい目を眼下の領土に向けながら言った。

「我らシュテルンベルグは昼の領主。アウグストは夜の領主に恋をしているのです」

「夜の、領主とは」

「ヴィクトル・オルバーン。狼の王」

パヴェルは恋人に囁くような声で唇に名を乗せた。まるで、自分もまたその人に焦がれているのだとも言つように。

3・ネイエドリー

昨夜と同じ蠟燭の点された部屋。今日、明るい時間に確認できたおかげで辺境伯のこの部屋が城の東端の門側にある円塔だということとは判った。もう一本、尾根側にも同じ形の円塔があり、そこにも扉が有ったがそこは今は使っていないらしく、夕方城に戻ってから内部の案内をしてくれたパヴェルは、何も言わずに通り過ぎただけだった。

夕食はパヴェルとアンナと三人だけで摂った。辺境伯は別の場所で夕食を摂る習慣なのだった。一家の主が家族と共に食事をしないのは私の常識では考えられないことだったが、その家によって余人が驚くような習慣が案外当たり前になっていることもあるので、私はそれには何も触れなかった。

そして夕食後、改めて執事に案内されて昨夜と同じ部屋に通される。辺境伯は昨夜と同じ場所に座り、微かに笑みを浮かべて私を出迎えた。

「この話を知らない人間に語れるのは嬉しいことだ。昨日はほんのさわりだけだったな、そう、ネイエドリーがこの地を見つけた時、すでに先住の民がいた、ということだけだ」

「昼間、パヴェル様からもアンナ様からもそれ以上のことは伺えませんでした」

「あの二人は私の楽しみを邪魔しないように気を遣ってくれたのだ

よ。さあ、では話の続きをしよう。

ネイエドリーがこの地にやってきた時、当然のことながら、今のように緩やかな道は作られていなかった。彼らは馬を宥め引き、馬車を人の手で押し、御しながらゆつくりと森を下っていった。しかしなにしろ中には女子供がいる。否、数からいえば成人した男よりもそちらの方が多かったらしい。谷へ降りる途中で日が暮れたので野営をした。その時、幾人かが明りがともったのを見たといったが、ネイエドリー自身はそれを見なかったし、明りなど見えなかったという人間も居た。

翌朝皆が谷にたどり着くと、そこには古い城が一つあった。

当然人が住んでいるものと思い、ネイエドリーは門扉につけられた鐘を叩いた。しかし城から誰かが出てくる気配はない。それならばすでに人のいない廃墟かとも思ったが、それにしても城や石垣に崩れた所がなく、なにより住む人の居ない家が持つ空虚な雰囲気かなかった。

これだけの人間が来ているのに何の反応もないことを不思議に思ったが、この谷は明るく日が差し込み、畑を作るにはちょうどよさそうだった。それに硬く門を閉ざしたままの城を除けば、一面の野原は誰かの手が入っているようには見えない。

ネイエドリーは城の持ち主と交渉し、この地に安住したいと考えたので、城から少し離れた場所に一族の者たちを集め、主だった者と谷の探索に回った。谷の土は想像以上に肥えていて、農夫達を喜ばせた。

男達は森に狩に出かけ、女達は焚き木や木の実を集めた。皆、今度こそ安住できる地を見つけたという希望に顔を輝かせていた。

そうこうしているうちに日が落ちた。

不思議なことに、日が落ちると暫くして、城の門が開いた。

ネイエドリーは、さては城の中に住むのは悪しきモノかと身構え、女や老人、子供を中心にして周りを男達で囲うように指示した。そうして自身は数人の供を引き連れて城へ向かった。

城の門は彼らを出迎えるように大きく開き、正面に円塔が二つ見えた。……そう、昔は、この塔の向こうが正門だったのだ。

門の前で、ネイエドリーについてきた騎士達は留められた。何故か足が竦んで一步も動かなくなったのだ。騎士たちが口々にネイエドリーを制止し、危険を訴える中、ただネイエドリー一人だけが招かれるように城の中に足を踏み入れることができた。踏み入れざるを、得なかったというのが正しいのかもしれない。彼には一族を守る義務があり、この土地に住みたいという欲があった。たとえ悪魔であつても自分の剣で討伐できるという自負心もあつた。

今は騎士の間と呼ばれている広間があるだろう。今は壁に塗り込められているが、昔は扉があつたという。その、大きく開かれた扉から広間に入つたネイエドリーは雷に撃たれたような衝撃を受けた。広間に集っていた十数人の人々。彼らは今までネイエドリーが見たこともないほど優雅で、途方もないほど美しかったのだ。

白い肌、赤い唇、暗色の髪。

見た瞬間、人間ではないと分かった。しかし彼らには、それでも惹かれずにはおられない魅力があつた。

「ようこそ、人間の殿」

中でも長と思しき男が集団から抜け、ネイエドリーに話しかけた。

その声は気品に満ち、響きの良い弦楽器のように空気を震わせた。

「闇に住まう方々とお見受けいたします。私の名はエドゥアルト・ネイエドリー。故郷を失い、一族を率いて安住の地を探し求めています。この地こそ我らの住まう土地であればと望んでおりますが、この土地がすでにあなたの方のものだと言うのなら我らは夜明けとともにここを去りましょう。ですから、我が一族に危害を与えることのないよう、お願い申しあげる」

辺境伯は言葉を切り、乾いた喉を潤すようにぶどう酒を口に含んだ。釣られて私も一口飲む。話を聞いているだけだというのに、まるで自分がネイエドリーその人であるかのように緊張して喉が乾いていたのだ。

辺境伯は頭の中で話の筋を追うように暫く口を閉ざした。蠟燭の炎がわずかに揺らぎ、芯の燃えるじじ、という微かな音が聞こえた。贅沢に蠟燭を使い明るいはずなのに、なぜだか部屋は奇妙に暗く感じた。ネイエドリーも、明るく灯された広間をそれでも暗いと感じただろう。人ではない者たちが集う場所にただ一人足を踏み入れたのだ。それがどれほど美しかろうと、否、美しいほど、恐ろしかったに違いない。

「男は言った。

「ネイエドリー殿。あなた方さえ良ければこの地に住まい、好きに治めると良い。我らは夜にのみ生きる種族。耕すことも紡ぐこともない故、あなた方の邪魔はしない」

「夜の種族の殿。私には一族のものを守る義務があります。あなた

方が人間を害する種族ならば私は一族を守るため、あなた方と争わねばなりません」

「我らは生き物を糧とすることではあなた方となんら違いはない。そして我らはむやみに殺して糧を得ることもない。我らはただ願うのみだ。」

この城の半分は我らのものであること。一日の半分は我らの時であること。そして月に一度、我ら一人につき一人の人間が糧となってくれること。

無論殺しはせぬ。数日弱ることはあってもそれ以上の害はないことを約しよう。これらの願いをはねのけたとてあなた方がこの地に住まうことを拒みはせぬ。我らは同族しかみない暮らしに些か飽いている」

ネイエドリーは夜の種族の望みをかなえると約束した。約束をせずとも移住を拒まぬと彼は言ったが、それは彼らの場所に無作法に入り込み、彼らと敵対することを意味していたし、はつきりとした取り決めのあつたほうが一族のもの達が怯えることなく日々を送れると思つたからだ。

一族の者達の意見は割れた。そのような犠牲を払うのなら出ていくべきだという意見も当然ながら出たし、害がないという言葉を信じられないという者も大勢いた。

ネイエドリーは年少のものや女達の言うこともないがしろにせずよく耳を貸し、それでも、と三日に渡つて説得を繰り返した。

やがてほとんどのものはネイエドリーの説得に応じた。

何故ならば、彼らは長い放浪に疲れていたのだ。放浪の途中で死んだ者も少なくなかつたし、生まれた時から放浪の暮らししか知らぬ者もいた。

たとえ犠牲を払おうとも安住の地を希求するほど、彼らは疲れき

つていたのだ。

ところで何故ネイエドリーはそれほど熱心に説得したのだろうか。長い旅をしてきたとはいえ、谷からもう一度上らなくてはいけないとはいえ、人ならざる者と約してまでこの土地に拘る理由などあったのだろうか、と君は不思議に思っているだろう。

理由はあった。

彼は、城に住む娘に恋をしたのだ。

名をエミーリア。夜を染めた黒髪に、月の光を集めた金色の目をした女だった。細い柳の肢体と猫のしなやかな足を持つ女だった。この城で話したのは長の男だけ。ネイエドリーは一言も交わさなかったエミーリアと再会するために、彼女の声を聞くために、一族に安住の地を与え、一族を贄にすることを選んだ」

ふう、と辺境伯が息をついた。否、それは私のため息だったかもしれない。辺境伯が私を見て微笑んだからだ。じわりと夜に溶けそうな笑みだった。不思議なことに、藁束のような力強い髪色と青空のような目と日に焼けた浅黒い肌を持ちながら尚、朝執務室で見る彼よりも、夜見る彼のほうがしっくりと馴染んでいるように私には感じられた。

「今夜はこれで終わろう。君も聞き疲れただろうし、私も少し話し疲れた。そうだ、部屋に資料は届いていたか？」

「はい。大切なものをお貸し頂きました」

「私は大概執務室にいる。何か疑念があれば遠慮なくきなさい。明日も午前中はパヴェルが領内を案内しよう」

「ありがとうございます。ああ、閣下。あの、一つお聞きしてもよ

ろしいでしょうか」

「なんだろう」

辺境伯は笑みを湛えた表情のまま促した。

「夜の領主は……今の、話にでてきた彼らはまだこの地に在る、のですか？」

ふう、と辺境伯の笑みが深くなった。それはまるでいとおしいものを思うような甘い笑みだった。そうして辺境伯は、一言答えた。

「居る」

私はそれ以上続ける言葉を持たずに、ただ深く頭を下げて辺境伯の部屋を辞すしかなかった。

4・最後の狼（前書き）

四話は、ウルマンが辺境伯の話を最後まで聞き終わった後まで時間が飛んでいる為、文中に今まで話にでてきていない事柄が複数含まれます。

構成上、四話目としてこの話を上げますが、もしそれはちょっと…と思われまして、三話 最終話 四話 …、という風に読み進めてくださいませ。

4・最後の狼

新月の夜ばかりは城下のものは誰も家から出ることはないという。

ただ城は逆だった。

というよりも領主の一族が、というべきか。

召使い達は城下に倣い皆部屋に籠もり、季節の花の飾られた騎士の間に領主の一族……今は、辺境伯と二人の従兄弟、パヴェルとアンナが集まるのだという。

その席に、何故か私も同席を、と請われた。

客とさえ呼べない私を、なぜ家族だけの集まりに呼ぶのかといふかしかつたが、招待を断るのも礼を失した振る舞いだと思い招待を受けたが、さりとて普段着以上服など持ってきていない。結局背格好が同じくらいのパヴェルの服を借りることになった。

騎士の間はこの城で一番大きな広間だ。その中央に二十人は並んで座れるほどのテーブルが置かれ、広い部屋の隅々まで照らすほどあちらこちらに置かれた燭台に全て火が灯されている。

その贅沢な大広間に、しかし居るのは私を含めて四人の着飾った人間だけだ。

白地に一面銀系で刺繍の施されたアンナのドレスや装身具の深い紅の宝石の見事さは言うにおよばず、辺境伯もパヴェルも王族の主催する舞踏会でも遜色のない装いだった。それに二人ともアンナと同じ宝石を、辺境伯は胸に、パヴェルは腕につけている。

私もパヴェルに「決まりだから」と言われて同じ石のついた指輪を借り受け嵌めていたが、それは深い紅だが透き通り、光の角度に

よって金色にも見える宝石で、都でも貴族しか所有することのできない稀少かつ高価な宝石だった。

驚くことに、この宝石こそ辺境伯が納める税を賄っているのだ。しかも、わざわざ外国へ売りに行き、貨幣にしてから納めている。もともと私如きには縁のない宝石だったが、それでもこの宝石がわが国で採取されるものだという話は聞いたことが無い。恐らく関係する者達が嚴重に口を閉ざしているのだ。

そこまでして宝石の出所を隠す理由が私には分からなかったが、あるいはそこまでして隠す理由こそが、今私が場違いにも辺境伯とその家族の集いに参加している理由なのかもしれない。

おかしいことに、若いパヴェルとアンナが話をしたり笑ったりしているのに対し、主人席ではなくその斜め向かい、アンナの隣に座った辺境伯は一人緊張しているようだった。たつぷり注がれたぶどう酒を飲まないまま何度もグラスを上げ下げしたり、部屋伸隅の蠟燭が消えたとき立ち上がり、自ら火を移しにいたりしている。その落ち着かない様子に若い二人が訳知り顔で少し微笑みを浮かべたりするのも、私にはおかしいことのように思えた。

なんだか、恋人を待つ男を見る友人のような目で辺境伯を見ているように感じるのだ。少しの揶揄いや冷やかしゃ、ほほえましさ。そんなもので二人は辺境伯を見ている気がした。

一族の集いというわりに何か重要な話がなされる様子もなく、私が予想していたように宝石の話がされるでもなく、広いテーブルの上に置かれている皿には干しぶどうと桃、それに蜂蜜をかけたチーズと、普段食卓に並ぶものしか置かれていない。

暫くの間は部屋を見ていたりパヴェルやアンナと話をしたりグラ

スのぶどう酒を飲んでいたりしたが、グラスも空になり手持ち無沙汰になってくると段々落ち着かなくなってくる。なぜ私がここにいるのか、この集まりの趣旨は何なのか全く理解できないのだ。

私は居心地が悪くて、小声で隣に座るパヴェルに声をかけた。

「あの、パヴェル殿。この集まりは……」

「もうすぐですよ、ウルマン殿。ああほら、いらっしやった」

言うなりパヴェルは立ち上がり、アンナと辺境伯も立って戸口を見つめている。私も慌てて立ち上がると、開かれた扉の向こうから確かに、人の足音が聞こえてきた、とほぼ同じくして足跡の主が騎士の間に入ってきた。

美しい。

その方を見た瞬間、私の頭はその一言で占められた。

白い肌、辺境伯のものよりも色濃い、肩の下あたりまでの蜂蜜色の髪。灰色がかった翡翠色の目の色は、彼がテーブルのそばにやってきたときに確かめることができた。

濃いえんじの地に金の刺繍の施された服は、私の知る限りでは百年以上前に着られていた丈の長いチュニックだったが、彼が着ているとまるで違和感がなかった。

優しい笑みを浮かべているのにどこか悲しげな顔で、彼は当たり前のようにテーブルの短い辺、主人の席に着いた。それを合図にしたように皆も座った。

「こんにちは。アウグスト、パヴェル、アンナ。そして君はウルマ

ンだね。アウグストから話を聞いているよ。私はヴィクトル・オルバーン。この地の夜を統べる最後の狼だ」

低く甘通りの良い声だった。心にしみこむような、それでいて背筋を正さずにはいられない声だ。

狼。それは夜の領主が自らの一族を表すのに使った名だという。森の中で最も恐れられる動物。

なるほど確かにこれは人ではありえない。

私は、恐らく遠い昔ネイエドリーが納得したように、すんなりと納得した。同時に、この人の眼に色が現れているのは、人間と契約を交わしたからなのだと辺境伯の話を思いだし、この狼は誰と契約をしたのだろうとちらりと思ったが、考えなくてもそれは辺境伯でしかあり得なかった。

パヴェルからもちろりとそんな話を聞いたし、なにより辺境伯は恋しい者を見る熱の籠もった眼でヴィクトルを見つめていた。

従僕のように辺境伯が立ち上がり、ぶどう酒をヴィクトルの前に置かれたグラスに注ぐ。空になった各々のグラスにも再びぶどう酒が満たされた。ヴィクトルが少しグラスを掲げると、三人も同じようにグラスを掲げたので、私も倣った。

「今宵も昼と夜、両方の一族が揃ったことを祝して」

ヴィクトルの言葉に和して皆でグラスに口をつける。

「パヴェル、婚姻を結ぶ相手は決まったのか？ 先月の話はどんなだった」

「あれは破談になりました。どうも姫君の父親が、このような辺境に嫁がせるのは不安だったようで」

「早く結婚してこの城に子供の声を響かせてくれよ。アンナも、結婚してもこの城に住んでくれ」

「そうですね、ヴィクトル様。最初の子はヴィクトル様が名付け親になつてくださいませね、アウグストにはその次の子の名前を決めてもらいます」

「楽しみだな。私は賑やかなのが好きなんだ」

目を細めてヴィクトルは笑った。この静かな大広間、二つの一族が揃っても四人しかいないこの場所にヴィクトルの言葉は悲しく響いた。

おなじことを思ったのか、アンナの笑顔が少し曇る。

「そうそう。ウルマン殿は、石についてお調べとのことでしたな」

「は。はい。この地で採取できるものとは寡聞にして存じませんでした。税の大半を宝石の売却益で補っているようですが、わざわざ隣国へ売ってまで隠す理由があるのかと」

「いいのか？」

「頃合いだろう」

ヴィクトルは辺境伯に問いかけ、伯は頷いた。それを見て再び私に視線を戻し、ヴィクトルは柔らかに言葉を継いだ。

「あの石は狼の血肉だ。我らはおとぎ話のように死しても塵にならない。石になるのだ。それを砕いて売っている」「だがそれも永遠ではない」

「それは、そうですね。それがつきた時はどうなさるのですか？」

「それが尽きた時に、我らの領土は終わる。道を閉ざし、誰もたどり着けぬ土地で暮らすも良し、他の土地へ移るも良し。ウルマン殿。私が君をこの場に招いたのは、領民の移住を手助けしてもらいたい

からだ」

「お待ちください！」

私は思わず声を上げて辺境伯の言葉を遮った。パヴェルもアンナもすでに納得済みの話なのか穏やかな顔をしている。ただヴィクトルだけが物言いたげに眉根を寄せていた。

私は気を落ち着かせる為に皆の顔を見渡し、一度大きく息を吐いた。

「私は一介の収税官です、辺境伯の望まれるような手助けはとても」

「ウルマン殿、私は確かに王宮には足を向けないが、王宮の動向に関心を持たずに済ますことはできない立場だ。庶子ではあるが紛れもない王の従兄弟殿が王宮官吏になっているという話は耳に入っている。爵位を望まず一官吏として王に仕えているが、王の寵愛は深く、近いうちに叙爵を受け重要な地位に就くことは間違いないと。

このたび我が領土に来たのも、叙爵の為の準備の一環か、他の理由があるかもしれないが少なくとも公務ではないだろう。君自身が言っているように、辺境伯領とはいえ我が領の納税金額を考えれば、貴族か、官僚ならば収税長官が赴くのが順当だ。調査だけだとしても、なんの地位もない収税官が一人で来るような用件ではない」

辺境伯の言葉は少しも揺るがなかった。当たり前のことを言うように言った。

私は少し笑った。笑うしかない。

辺境伯のいうことは一つも間違いではなかった。

確かにこの地に来ることは上司である収税長官に言われたことではない。どころか、今、私は病氣療養で休職中ということになって

いる。もつとも往復だけでも半年掛かる行程だ。王都に戻った時、収税官としての私の席はなくなっているだろう。

ここに来たのは、王から直接命じられたからだ。

否、あの気のいい従兄弟は「命じた」という意識もないだろう。

あの男は王という地位がどれほど影響力を持つものか、きちんと理解していない。

だから私が王家との関わりをひた隠しにして、難関の試験を正規の手続きに則って合格し、念願の収税官になったことも、よりにもよって王が王宮の中で私に声をかけるなどという軽挙で王家との血縁を明らかにされ、縁故のみで官吏の地位を得たと言われていることも、同僚や上司から疎まれていることも、貴族や王の周辺のいる人間に妬まれ嘲笑され媚びられることも、王にとっては気にするようないことではないのだ。

王家に生まれながら市井の女との結婚を望み、地位を捨てた私の父と今の王は、奔放なところがよく似ていた。奔放さとは愛される性情であり、現に私の父が今では市井に溶け込んで周りの人間に愛されているように王も皆に愛され甘やかされていたが、しかし奔放さとは王の持つべき資質ではないし、私は父のことも王である従兄弟のことも、愛してはいたが許せないと思うこともあった。

『なあウルマン。私はもつと自由に使える金がほしい』

そんな一言で私はここまでやってきた。

逆らうことなど、許されないし考えもしなかった。憧れの、狼殺し辺境伯といまだに呼ばれる伯爵家と、その領土を見られる機会が訪れたことに感謝しただけだ。

ただもう私は、王都に戻ったら王宮を辞して街で仕事をしようと

思っていた。これが王に奉仕する最後の仕事だと覚悟を持って、ここまでやってきたのだ。

辺境伯は、私に覚悟を踏みにじり再び王宮へ舞い戻り、王の寵臣、縁故のみで厚く遇される愚物になれと、言っている。私は指先や頭がすつと冷たくなるを感じた。

「私は……。私、が……。パヴェル様やアンナ様と親しくなれば、そしてこの美しい方を見れば、私は王都でこの伯爵領の為に尽力せずにはおられないだろうと、アウグスト様はお考えになられたのですか」

「そうだ。私は君なら親しくなった者を見捨てないだろうことを見越して年の近い二人を近づけ、君を今日ここに呼んだ」

「アウグスト！ まだ時間はあはらずでしょう」

「猶予はない。私はヴィクトルを砕かせはしないし、誰の手にも欠片すら渡す気はない。残りの石は一人分だ。保つてもあと三十年。ウルマン殿が王宮で力をつけ、ある程度の独断が許されるようになるまでに石が枯渇すれば、その時点で我が領地は暴かれ踏みにじられて終わる」

「アウグスト。私が死ぬ時は君も死ぬ。死した後、この身体がどうなるかと君には関知できないだろう。私はこの領の為に使ってほしいよ、他の皆がそうであるようにね」

「駄目だヴィクトル。私は他の誰にもあなたを奪わせはしない。それにあと何十年か引き伸ばしたところで、結局近いうちに終りは来るのだ」

静かな声で、けれど底光りする眼で辺境伯はヴィクトルを見、私

を見た。

逆らうことを許さないという眼だ。

気圧されて黙り込んでしまった私の隣でパヴェルはじつとテーブルの上を睨みつけていた。私が辺境伯の為に動くにしろ動かないにしろ、近い将来とてつもない重荷と共に辺境伯の名を継ぐのはパヴェルだ。

「それほど言うのならアウグストが終わらせれば良い」

「お兄様」

「そうだろうアンナ。ヴィクトル様は最後の狼だ。ならば最後の狼殺しであるアウグストが領地の始末もすればいい」

「最後の狼の滅する時までこの地は辺境伯の領土であり続けなければならぬ。それが我ら昼の領主と夜の領主の約束だ」

「ヴィクトル様。あなたさえ了承すれば約束は反故にされる。そうでしょう？ 何故たまたまこの地にただけのウルマン殿を巻き込まねばならない、彼の生き方を曲げてまで我らに協力させるなど……」

「お兄様、ヴィクトル様を困らせないでくださいませ。狼が富をもたらし我らは狼のために生きる。それは破られることのない約束であるはずです」

「いいや、アンナ。パヴェルの言うとおりだ。何故関わりのないウルマンが私たちの為に苦しめられなければならない？ アウグスト、君は私のことを考えすぎる。もっと」

「私が大切なのはあなたただだ。他の何もあなたの存在にかなうものはない」

「……君は困った男だな」

ヴィクトルは悲しそうな顔で微笑んだ。
私は。私はどうすべきなのだろう。

しんと静まり返った広間で、蝋燭の燃える音だけが響いた。

5・主と収税官

エルンスト・ヴェツェラ。この国の王太子が自分の従兄弟であることを私は子供の頃から知っていた。

王都にある貿易商の一人娘と王子の一人だった男の恋物語はとも有名だ。

前代の王には正妃や側室の産んだ子供を合わせて男児が七人いて、王子は側室の産んだ六番目の子供だったし、王族自体の数も多かったから王家の中では然程注目される存在ではなかった。

けれどそれも、身分もなければよほどの豪商というわけでもない商家の娘と結婚したいがために王族の身分を捨てる、ということになれば話は別だ。

王家と商家の間で何度も使者が行き来し、劇場では結婚がまとまる前から早くも引き裂かれる恋人の悲恋劇が掛かり、王都では中程度の、とくに目立つことはないけれど長く堅実な商売をしている貿易商の名は、一気に知れ渡った。

名が売れて商売に有利に働くこともあったがむしろ悪い方に転ぶことの方が多く、娘の父親、私の祖父は大変な苦労をしたらしいし、母も好奇心や揶揄な中傷に疲れ、何度も何度も結婚を諦めかけたそうだった。

それを覆したのはただひたすらな王子の愛情だったという。毎日

貿易商の家に通い、商人に頭を下げて仕事を覚え、怖気づく娘に日に何度も言葉を尽くした。

『僕は君と一緒に過ごす日を手に入れる為なら、この国を出て行く覚悟もある。王族としての仕事以外は働いたことのない僕だけど、幸い健康に生まれついた頑丈な体を持つてるし、何でもして君を幸せにするよ。……でも、僕は出来ることならば逃げたくは無い。君と私の家族に私達の結婚を祝福して欲しいし、何より僕は近々籍を抜かれるにしたって王族だ。何かがあったら国と民の為に命を捧げるのが王族だと言われて育ってきた。無論君が一番大事だけれど、それでもこの国で、この国の為に生きていきたい。だから時間をくれないか？　そして信じて待っていてくれないか？』

王子はことあるごとに娘にそう訴え、そしてとうとう国王の許しを得て王籍を離れ商家の婿になった。

それから一年もしないうちに王太子の結婚が決まったのは王の配慮だったのだと今でも両親は王に感謝している。王太子の結婚が決まると商家に婿入りした元第六王子の噂などあつという間に消えてしまったからだ。もちろん事實は消えないからそれからも好奇心にさらされたが、商売が貿易商だ。元々旅の好きだった母と、一度も王都から出たことのない父は結婚してから船で世界中を回り、ほとんど王都に帰ってこなかった。

私は、船の上で生まれた。二歳になって初めて王都に帰ってきて、それから祖父母に育てられた。両親はまたすぐに旅立ってしまったし、私には落ち着いて育つことのできる環境が必要だと祖父がこれだけは譲らずに両親に強く言い張ったからだ。

両親とは一年に一度くらいの頻度でしか顔をあわせなかった。戻ってくる度、父は「今度の航海は一緒にいこう」と私を誘ったが、

私は海に出るより学校の方が楽しかった。特に数学は私を夢中にさせた。母は「おじいちゃんの血ね」と笑い、父は遠い国にはおもしろい計算の用具があるぞといった。

父は航海と貿易に夢中で、息子も夢中になるに違いないと思いこんでいたのだ。

でも私は船で生まれたくせに酷く船に酔う性質で、出来る限り海には近づきたくなかったし、父の航海熱を引き継いだ弟と妹がいたので、私は都で自分の好きな勉強に打ち込んでいられた。

五歳違いの弟が少し大きくなってからは、弟が貿易業を継いで海に出て、私が店の経営をするということが半ば暗黙の了解になっていた。

けれど私は官吏になりたかった。

私が官吏になりたいと思ったのはいつの頃からだっただろう。

父と同腹の兄は仲が良く、父が王籍を離れた後もよく家を訪ねてきたり、時には外交のついでがあるからと一緒に航海に出たりもしていた。

私はこの叔父が好きだった。父とよく似た風貌をしていたが年中航海に出ているせいでたくましく日焼けした父とは違い、王宮で司書をしている叔父は色白のおとなしい人で、私が興味があるという貴重な数学の本を持ってきてくれたり、王宮の仕事の話をよくしてくれた。

「ウルマンは頭が良いね。大人になったら私の仕事を手伝ってくれないか？」

冗談なのか本気なのか叔父はよくそういった。私も大好きな叔父

の役に立ちたい、と謂われるたびに思ったものだった。

或いは地方から働きに出てきている奉公人達が故郷の領主達から不法に税を奪われているという不平をよく聞いていたからだろうか。彼らは都に出てくるまで、定められた税率があることすら知らなかった。

あるいはやはり、三歳年上の従兄弟の存在があるだろうか。

エルンスト・ヴェツェラ。王子は成人するまで母方の名を名乗る。ヴェツェラ公爵家のエルンスト。成人すれば王太子となり、将来王となることを定められた彼と初めて会ったのは、私が十四の時、学校から家へ戻る途中のことだった。

突然近づいてきた立派な馬車が私の横に止まり、降りてきた御者によつて無理矢理馬車の中に押し込められた。

まさか誘拐か！ と血の気の下がった私の目の前に、座席に座った彼がいたのだ。

栗色の髪、白磁の肌。高級な人形のように少女めいて整った顔と、差し出された白い手。好奇心と驕慢の混じった笑み。

「エルンストだ、ウルマン。やっと会えて嬉しいよ。母様が君と会うことを許してくれなくて、でも叔父上に君の話を聞いていたから、ずっと会いたかったんだ」

「……エルンスト、殿下？」

「殿下はやめてくれ。私達は従兄弟同士だろう」

そういつてエルンストは私の手を握った。私は呆然と、なされるがままに彼の向かいに腰掛けた。父が元王族とはいっても私が生まれた頃には当然ながら王家とは公式に縁が切れており、行き来もなかった。私の家は中流の貿易商で、私は裕福な子息の多く通う高等学校に通つてはいたがそれはあくまで市井の商家としての部類であ

って、貴族や騎士など家柄のある者は家に教師を住まわせていたら、そういった階級との付き合いは全くといってなかった。

いくら従兄弟といわれても、彼は王子であり、王太子になるはずの人間だ。私とは身分が違いすぎた。

馬車の中でエルンストの話を聞きながら私は現実感を失い、ふわふわと要領の得ない受け答えをしただろう。

だというのに何が気に入ったのか、それから何度もエルンストはお忍びで王都へやってきては、馬車の中で話をすることもあれば、市場と一緒に歩くようなこともあった。そんな時は周囲に護衛の人間がいるとわかっていても、帽子や服装ではごまかし切れない品のよさを持つエルンストが何か悪いことに巻き込まれやしないかとひやひやしながら隣を歩いた。

私が十五歳になるとエルンストは正式に王太子になり、ヴェツェラの名を捨てた。

それで多忙になり私のところに顔を出す余裕もなくなるかと、寂しさ半分安堵半分思っていたら彼は無いはずの暇を見つけては顔を見せにきた。

なのに不思議なことに彼は私の家に来ることは無く、祖父もまた、理由はわからなくもないが、エルンストと私が会うことにあまり良い顔はしなかった。つまるところ祖父と私は似た人間だということなのだ。

『身分違い』この言葉は、娘が王族と結婚した祖父と、父に元王族をもった私の心にこそ重くのしかかる言葉だった。

「ウルマンは将来何になるつもりなんだ？ 王宮で私を助けてくれないか？ 叔父上もそれを望んでいる」

私が十八歳になり、学校を卒業する年になると頻繁にエルンストからそういわれるようになった。彼は祖父や父にも私に言ったのと同じ内容の手紙を送ったらしい。祖父からは『お前の好きなようにすると良い』と少し悲しげな顔で言われ、海を挟んだ隣国にいる父からは絶対に反対だ、という返事がわざわざ急便で来た。本人もすぐに帰ってエルンストと直接話をする、と書き送っても来ていたが、それには及ばない、と私は返信した。

私はそれから祖父に頼み、祖父とは血縁関係のない縁戚の家に養子に入った。公正に試験を受ける為だ。

その頃には私は、収税官になることを決めていた。エルンストに言えば簡単になれただろうから、言えなかった。両親には、家を継がないことを言えなかった。どのみち難関といわれる試験を突破できなければ、収税官になるもならないものだ。

エルンストとは、父にくっついて旅に出ることになったから、と嘘をついて連絡を絶った。

それから二年、勉強に勉強を重ね、私は収税官になるための試験に合格した。事後承諾になった両親にはものすごく怒られ勘当を申し渡されたが、私は満足だった。

六年間地方官吏として働き、中央に呼び戻されて二年。二十八歳になった私はエルンストの存在を意識の遠くにおいやっていた。実際収税官が詰める執務室は一応王宮内に位置しているとはいえ王族の住まう本宮や彼らの外交や執務の場である第二宮とも離れた外郭近くの第三宮にある。王族はもとより子爵以上の貴族すら滅多に顔を合わせないのだ。

エルンストも三年前、前王の急逝によって早くも王となり、数年前に少し親交のあったくらいの平民の従兄弟のことなどすっかり忘れていたと思うていた。

その日。私は何の変わりもなく朝出仕するとすぐ同僚と予てから何度も提出していた地方への税率周知の徹底案について話し合った。同僚も地方の民が公で定めた税率を知らないことが多いというのを問題視していて、二人で収税長官に訴える為の書類を作り上げようとしているところだったのだ。

書類は細かい箇所を手直しして、殆どもう提出するばかりとなっていた。誤字などの最終チェックをしている私の前で同僚が少し興奮した声で言ってきた。

「そういえばウルマン。聞いたか？ 今日、なんと陛下がこの第三宮においでになるそうだ。朝方急におっしゃられたらしくてな、さつきから長官達が陛下をお迎えする準備をどうしたらいいのか慌ててる。まあ俺達には関係ないけどな」

「これから総出で掃除とかさせられるんじゃないか？」

「そんなわけないだろう。あるとすれば服装検査とかな。まあ、陛下も長官達と会うだけで手一杯でこちらまではいらつしやらないだろう。第三宮には長官と名のつく方が……何人いたっけ」

「二十五人」

第三宮は私の所属する収税を初めとして王宮の修繕や夜警など、絶対に必要だが大きな変化の少ない役職の者達が入っていて、宮の大きな割にそれぞれの束ねる長官は数多くいた。その全てが日頃陛下を初めとする高官に会う機会など無い者ばかりだ。訴えたいことも多いはずで、彼らの話に耳を傾けていれば数時間はすぐに経ってしまう。結局適当なところで話を切り上げてさっさと帰るだろうというのが同僚の予想で、私もそれに賛成だった。

いったいどういう気まぐれで第三宮なぞに来るのか……、とちら

と思ったが、ほどなく長官の代わりに入室した副長官が始業を知らせ、すぐに忙しさに取り紛れてしまった。昼近くになって戸口のあたりがざわめくまで、私は今朝聞いたことをすっかり忘れていた。否、忘れようとしていた。もう私は王とは、エルンストとは何のかかわりもない人間なのだと自分で決めたのだから。

「ウルマン！」

叫び声に顔を上げると、戸口からまっすぐに向かってくるエルンストが居た。最後に会った十年前より一層精悍になった秀麗な顔。それが喜色と怒りを等分に浮かべて私を見据えている。彼の周囲だけが薄暗い部屋の中で輝きを放っているようだった。

「何故私に何も言わずにこんな所に？ 会いたかった、何度も君の家に使いを出したのに、誰も君のことを教えてくれなかったんだ」

「陛下……！」

「止めてくれそんな呼び方。エルンストと呼んでくれウルマン。君は私の大切な従兄弟じゃないか」

エルンストの言葉と同時に部屋の空気が変わるのを、私はエルンストに抱きしめられながら感じた。それは肌があわ立つほどの冷たい変化だった。

「私は何故、陛下が私などを傍に置きたがるのか、わかったような気がしました」

「何故……？」

「私はその日以降、人を信じる事が出来なくなった。その朝まで一緒に同じ目標にむかっていた同僚すら、信じられなくなりました。父が私を勘当してまで反対していた理由がわかりました……父やエルンストが生まれたときから囲まれている『現実』を、私は目の当たりにして……恐ろしかった。私がエルンストと同じ立場でも、誰かに傍に居て欲しいと願うでしょう、誰か、誰か」

「地位や血統で見る目を変えない誰か……？」

パヴェルの言葉に私は小さく頷いた。そう、私はうってつけだっただろう。従兄弟同士という血の近さ、けれど王位を巡る競争相手にはなりようのない相手。叔父が私を王宮に迎え入れようとしていたのもきっと、エルンストの為だった。

私は一杯に開けられた窓から入ってくる、涼やかな風を胸に吸い込んだ。

昨夜、ヴィクトルと共に席を立った辺境伯は今日は塔に閉じこもったままだ。貧血で寝台から起きてこれれないということで、今日は執務室にパヴェルが座り、私は同じ部屋で報告書を書いていたのだが、何故か身の上話をする事になっていた。

パヴェルは机の上に置かれた書類にサインをしながら「本当に王の従兄弟だったのか」と呟いた。従兄弟というのが実際血が繋がっているというだけで、父は王籍から外れているから、書類上では全くの他人だ。

「ですから昨日辺境伯が言われたような叙爵はありえないです。周囲が許しません」

「それにしても……。王は君を信頼しているんだろう」

パヴェルの暗い声に私は彼が何を心配しているのかわかった。

この領地と領民の為に働くことは、そのために王の傍近くに仕えることを選ぶことは、王の信頼に対する裏切りだ。二心がないからこそ私を傍に置こうとしている王を利用するために近づく。

「……私は、あなた方のために働きます」

「ウルマン殿」

「決めたんです。尤も、戻って見たらとくに陛下は私のことなど忘れて居るかもしれませんが、陛下のお心だけで出世できるほど王宮は甘いところでもないでしょうが、それでも、出来る限りのことはします」

「……けれど、それは……」

「……辺境伯は、どこか悪い、のでしょうか……？」

「……ああ。ヴィクトル様が仰るには、あと十年はもたないそうだ。体の奥から死臭がすると、誰にも治せない病だと」

辺境伯があればほど急ぐ理由を考えて出した推論だったが、いざ当たったとなると言葉を失って私は黙り込むしかなかった。もし今年私がここへ来なくても、一年か二年のうちに彼はたとえば税を故意に少なく収めるとか馬を献上しないとかがそういう方法で誰か王都から人呼び寄せたに違いない。そう思うと、今、ここへ来たのが自分でよかったとも思える。そうでなければ知らないうちにこの領土が閉ざされ、あの美しい狼や領主一族に出会うことも無かった。

そして、そつと離れるだけにしようと思っていた従兄弟の傍に戻り、彼の信頼を盾にして彼を裏切る決断をすることもなかった。

「では、急がなくては……なりませんね」

「ウルマン殿、けれど何故」

パヴェルの問いかけに私は答える言葉を持たなかった。

何故といわれればそれは幼い頃から憧れだった辺境伯領を守りたいからだ。

何故といわれればヴィクトルの美しさに圧倒され、魅入られたからだ。

何故といわれれば辺境伯や、パヴェルやアンナのことが好きになったからだ。

何故といわれれば私はあの従兄弟を愛し、けれど従兄弟に愛され継られることに疲れているからだ。

何故といわれれば私の夢を奪った従兄弟を、憎んでいるからだ。

どの理由も本当だったが、どの理由もあえて考え出した言い訳にすぎなかった。理由など本当のところ私にもわからなかったから、ただ私は「明日、王都へ戻ります」と告げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6328y/>

狼殺し辺境伯の告白

2011年12月1日21時47分発行